Ｄｒ．Ｎのピーナッツを探る

（１）

ピーナッツの二大不思議

ピーナッツは優れた食品であるにかかわらず、その消費量は年々減少しているいます。それは、アーモンドやクルミなどのナッツに押されて縮んでしまったためでしょう。ピーナッツにはニキビが出る、太るなどのマイナスイメージが定着してしまったのも一因です。

かくて、ピーナッツ悪玉論を払拭して、善玉復権を願いの筆をとった次第です。一応科学者ですので感情論でなく、客観的にピーナッツを探ってみたいと思います。

最初はまず、ピーナッツ入口論ですが、かねてより不思議に思っていたことを探ってみましたい。皆さんの不思議を代表していると思います。

不思議のその一は、ピーナッツはナッツでなく、豆であることです。英語でpeanutと書きますので、ナッツ類と信じられやすいです。ナッツとは堅い殻に包まれた木の実をいいます。アーモンド、クルミ、栗（Chestnut）などをいいますが、ピーナッツは固い殻（莢）に包まれているから、分類学の無い頃にその仲間に入れられたのでしょう。このため学生たちは木の実だと信じ、樹木にぶら下がっていて、収穫時はざるを抱えて、ピーナッツの実をもいでいる図を頭に描いています。ピーナッツは豆であって地中に実るというと、想像できないという顔を一様に返します。

第二の不思議は、なぜ「落花生」というのかという不思議です。中国語では「花生」です。この語源は落花生の不思議な実のつけ方にあります。花は、花びら、雌しべ、雄しべ、

雌しべの最下部は膨らんでいて受精し実を実らせる花柄（かへい）から成っています。そして花を支える膨らみの取れた「子房（しぼう）」があります。

そのまかれる子房が近くに咲き花びらがすぐ地面に垂れて花柄（へい）が重なるとこれは垂れ始めます。そこから不思議、子房を支える子房（しぼう）柄（へい）がピンと垂れ下がり、ピンと伸びてきます。子房はやがて長く伸ばされ続けて子房柄が押し込まれ続けて地面に頭を突っ込まれ伸びてきます。子房柄がピンと押し押されてぐったりと地面に突っ込まれて形成されます。子房柄セルロースを育てます。

花が落ちて、その下に実が生まれる、という呼ばれる植物は他に花粉を披露しました。

以上、ピンクの二つの不思議を披露しました。